

日本
音楽
学会

中部支部通信 第 97 号

MSJ Central Japan Chapter Newsletter No.97

発行：日本音楽学会中部支部

事務局：明木茂夫（支部長）

〒466-8666 愛知県名古屋市中昭和区八事本町 101-2

中京大学文化科学研究所 気付

日本音楽学会中部支部事務局

TEL：052-835-7194 FAX：052-835-7192

電子メール：nogchubu@msj-chubu.org

目次

・ 巻頭言.....	1
・ 第 141 回定例研究会報告.....	3
・ 研究の現場から.....	5
・ 事務局から.....	8
■第 142 回定例研究会（予定）	
■研究発表・原稿募集	

【巻頭言】

コンピュータ音楽研究と音楽学

水野みか子（名古屋音楽大学）

1. 国際コンピュータ音楽会議 ICMC の 50 年
2025 年「国際コンピュータ音楽会議 ICMC」は 50 回目を迎える。国際コンピュータ音楽協会 ICMA の年次大会として 1974 年にミシガン州立大学で第一回が開催され、翌 75 年にはイリノイ大学アーバナ・シャンペン校で第二回、以後、初期にはアメリカ合衆国での開催が続いたが、1993 年の東京（早稲田）大会のあと、2017 年の上海、2018 年の大邱、2022 年の深圳、

2023 年のソウルなど、近年はアジアでの開催が続いた。50 回記念大会は 2025 年 6 月にボストンで開催予定。ノースイースタン大学、ニューイングランド音楽院、バークリー音楽院という 3 つの教育機関がホストを担当し、「好奇心、プレイ、革新」をテーマに、創設者ディヴィッド・ウェッセル（1942-2014）の功績を讃える大きなイベントとして関係者の注目を集めている。

ウェッセルは音色研究の泰斗として知られる。彼がパリの音響音楽研究所 IRCAM にいた時期に発表した論文「音楽制御構造としての音色空間」(Computer Music Journal, Vol. 3, No. 2) は、コンピュータ・プログラムへの入力として

知覚の主観評価を取り入れる方法について 70 年代後半の主要技術を総括し、それを前提に将来展望を論じている。1970 年代以降の音色研究は、作曲家で研究者でもあったジャン・クロード・リセ (1938-2016) やスペクトル楽派の作曲家たちの活動とともに、フランスに端を発して世界に広まったと見ることもできるが、鳴っている音の様態を瞬時に把握するという意味でのリアルタイム・サウンド解析が技術開発の重要なテーマ領域であるという点からすれば、アメリカの高等研究機関からの成果は計り知れない影響力を持っている。

1970 年代には作曲や演奏に資する音響研究やサウンド合成が主軸であり、デジタルシンセサイザーに向けた研究がいくつも発表された。一方、今日、例えば ICMC2025 では、音響学・音響心理学、音響解析、物理モデルとサウンド合成、イマーシブ・オーディオなど、音響そのものに関わる領域と並んで、生成音楽、デジタル楽器、ジェスチャーベース・サウンドアクション、インタラクティブ・サウンドデザイン、ソニフィケーション、ライブ・コーディング、ロボティクス、AI・機械学習、AR・VR などといった、音楽以外のところで現代生活に馴染み深い領域が、音楽研究のテーマ領域として設定されている。こうした広い専門領域にわたる議論は、ゲームをはじめとするエンターテインメント、医療、生活環境、製造業や情報環境などの産業といった社会全般に浸透している技術と、音楽の創造や受容とが密接に結びついていることを示唆する。

注目すべきことは、音楽学研究が近年の ICMC で目立ってきているということである。第一回 ICMC での発表件数は全体で 41 だった

のに対し、今日ではペーパー発表が約 60 件、音楽発表が 300 件程度にまで拡大していて、そのなかでも、音楽学研究としてアーカイヴや歴史、レストレーション、記譜、音響社会学などは着実に増えてきている。

2. 近過去の再構築と保存

アーカイヴやレストレーションで現在特に重視されているのは、1980 年代から 2000 年頃までに創作された作品である。私自身も 1986 年からコンピュータ音楽に何らかの形で関わってきているが、特にエレクトロニクス音楽の場合、同時代の生き証人がいるので歴史研究の対象にならないというわけにはいかない。

目まぐるしく変化する技術にピッタリより沿って表現が生み出されつつある世界では、作品が生み出されるときにすでに「作品保存」への気配りが必要であり、過ぎ去った過去を歴史と呼ぶだけではなく、今現在起こっていること、今起こったばかりのごく近い過去のことが歴史研究の対象になるのである。この事態が音楽学研究において新たな方法論さえ生み出している。

例えばアーカイヴ研究。ICMA 理事メンバーの一人であるミリアム・アッカマンが ICMC のスピンオフとして 2018 年に立ち上げた国際シンポジウム AREM (Archiving and Re-Performing Electroacoustic Music) では、組織としてアーカイヴ構築に取り組む実践として、STEIM、ザッハー財団のスティーブ・ライヒコレクション、オックスフォード大学、IRCAM、ルクセンブルク・フィルハーモニー、フォルクヴァング芸術大学、ハンブルク大学のリゲティセンター等の状況が報告され、各組織

が扱う作品・上演のデータの特質や、整理・保存・公開の方法の多様性が明らかになっている。AREM の一つの目標は、ベートーヴェン研究や交響楽団活動等、上演芸術としての、より広汎な音楽を対象とする実践例を参照しながら、電子音響音楽をターゲットにアーカイヴ構造やマテリアルの形式を検討していくことである。

アムステルダムの研究所 STEIM のアーカイヴでは、リーダーであったミッシェル・ヴァイスヴィッツ (1949-2008) のパフォーマンス動画やシステムのうち、STEIM の組織内にあったものをオンライン公開している。ヴァイスヴィッツは 1985 年にジェスチャー楽器の最先端 HANDS を発表して大きな話題となり、インタラクティブ音楽の伝説的人物となっているが、彼が 1997 年に名古屋市と豊田市でパフォーマンスしたこと (ヴァイスヴィッツの唯一の日本公演) は STEIM では記録されていない。すなわち、STEIM の現在の課題は、組織やリーダーの全体像を保存することではなく、アーカイヴ方法の模索である。

レストレーション研究では、2022 年にイアニス・クセナキスの《ディアトープ》(1978) がパリで復活展示されて音楽学者の間でも議論が盛り上がった。日本でも古川聖がカールスルーエで発表した《まだ生まれぬ神々へ》(1997) や三輪眞弘のモノオペラ《新しい時代》(2000) が新システムによって復活上演されたが、音楽学からの発言は少ない。日本を含むアジアと欧米を統合的に扱うには日本の音楽学からの発言も必要だ。エレクトロクスの実践において先行した欧米と、後発だが破竹の勢いで作品を生み出している中国やアジアとの文化や芸術表現の比較なども有効であろう。今後ますます音楽学的ア

プローチが可能になると期待できる。

【定例研究会報告】

■第 141 回定例研究会報告

日時：2024 年 12 月 8 日 (日)

13 時 30 分～16 時 00 分

会場：名古屋音楽大学大演奏室 (C101)

開催方法：対面開催 (事前申込制)

司会：明木茂夫 (中京大学)

内容：〈レクチャー・コンサート〉

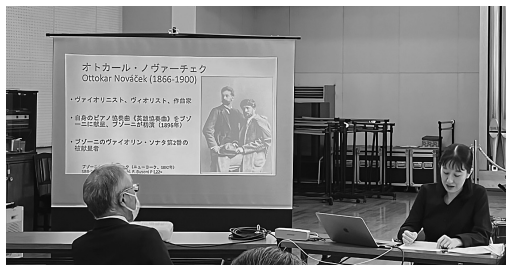
「F.ブゾーニによるヴァイオリン・レパートリー ～ヴァイオリニストたちとの協働の観点から～」

【概要】 畑野小百合 (南山大学)

2024 年 12 月 8 日 (日) 13 時 30 分より、名古屋音楽大学大演奏室 (C101) にて、レクチャー・コンサート「F.ブゾーニによるヴァイオリン・レパートリー～ヴァイオリニストたちとの協働の観点から～」を開催した。2024 年は、ブゾーニの没後 100 年に当たる。それを記念して、J. S. バッハ作品のピアノ編曲や美学的著作に注目が集まりがちなブゾーニの知られざる一面を紹介すべく、彼のヴァイオリン・ソナタ第 2 番 op. 36a (BV244) を中心に据えた研究会を企画した。

第一部として、畑野より 60 分程度のレクチャーを行った。ヴァイオリン独奏を伴うブゾーニの作品の創作は、1880 年代末から 1890 年代に集中している。それらはいずれもアンリ・ペトリ、エゴン・ペトリ、アドルフ・ブロツキー、オトカール・ノヴァーチェックといった、ブゾーニがライプツィヒ時代に親しく関わって

いたヴァイオリニストたちに献呈されている。この発表では、ブゾーニが彼らと交わした書簡の資料状況を確認し、それらの調査によって明らかになっていることを報告した。



ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin — Preußischer Kulturbesitz) には、ブゾーニ宛のノヴァーチェクの手簡 (1892-1899) が33通保管されており、筆者の知る限り、これらは先行研究において調査されたことがない。ヴァイオリン・ソナタ第2番の被献呈者であるノヴァーチェクとの手簡には、当該作品の成立についての言及が期待されたが、実際調査してみると、ノヴァーチェクのピアノ協奏曲である《英雄協奏曲》(1896年にブゾーニがベルリンで初演し、ブゾーニに献呈された) についての詳細な議論が大半を占めることがわかった。今後ノヴァーチェク宛のブゾーニによる手簡の所在が判明すれば、ブゾーニがこの作品の成立にどのように関与したかがより詳しく知られることになるだろう。

ブゾーニは、生涯に実に多くの手紙を認めた。それらの一部は、手簡集として出版されたりオンライン公開されたりしているが、未調査のまま眠っている手簡もまだ数多く存在する。特に、ブゾーニの手元に残った手簡の大半は彼の遺品としてベルリン国立図書館に寄贈されているが、ブゾーニが通信相手に送った手簡については収集されていないものもあり、今後も調査

が進んでいくことだろう。ここでは、ブゾーニ研究における手簡資料の重要性についても確認することができた。

第二部では、竹内英美子氏 (ヴァイオリニスト、東日本支部会員、常葉短大音楽科非常勤講師) と菅聖月氏 (ピアニスト、非会員、常葉短大音楽科非常勤講師) によって、ブゾーニのヴァイオリン・ソナタ第2番が演奏された。第一部のレクチャー内でも確認したように、3つの楽章を内包した単一楽章形式のこの作品は、自他の作品へのさまざまな暗示や引用を含んでいる。それにもかかわらず、全体として統一感のある大きな物語が形作られる説得力のある作品であることが、実演を通して明らかになった。



演奏後の質疑応答では、ブゾーニの一次資料の状況や創作傾向、同時代の前衛や保守的な批評家との関係についてなどの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。また、ヴァイオリン・ソナタ第2番があまり演奏されてこなかったことに対する疑問の声も聞かれた。文化的帰属の曖昧さや活動領域の広さ、前衛/保守派のいずれの傾向も見られる振る舞いなど、ブゾーニが必ずしも理解しやすい対象ではないことも一因であろう。また、「編曲=原典を歪めること」と捉えるオリジナル志向が、ブゾーニの評価に影を落としてきた側面もあるかもしれない。竹内氏からは、弦の素材の観点から、調弦

のタイミングがないままに30分以上の演奏が続く楽曲構成に、20世紀時点では困難を感じた演奏者が多かったのではないかという見解が寄せられた。音程が安定しつつ、ガット弦に匹敵する音色をもつポリマー弦が使えるようになった今、この作品の演奏史にも新たな展開が期待できるかもしれない。

ブゾニの研究の可能性について考え、知られざる優れた作品に共に耳を傾ける研究会は、運営スタッフの皆様の行き届いたオーガナイズと来場者の熱心な参加により、没後100年に相応しい学会イベントとなった。

【研究の現場から】

レクチャー・コンサート『音楽のジャポニスム—和歌と俳句の美的調べ—』開催

白石朝子（愛知淑徳大学）

〈演奏会情報〉

2025年3月23日（日）

13時30分開演（13時00分開場）

愛知県芸術劇場小ホール

（愛知芸術文化センター地下1階）



ジャポニスムは、19世紀後半から20世紀初頭にかけてフランスを中心に日本の美術工芸品に対して強い関心が寄せられ、西洋の美術に影響を与えた現象に始まる。その後、この関心は建築や文学、音楽などにも広まり、現在では様々な文化芸術におけるジャポニスムが研究されている。

西洋音楽におけるジャポニスムは、作曲家たちによって新たな表現の源として取り入れられ、独自の音楽的な流れを生み出した。それらは日本音楽を単純に模倣するのではなく、例えば音やリズム、旋律の選び方により、従来の西洋の響きの構造や音の組織に変革をもたらし、さらには日本の自然や風景、情緒を表現しようとする試みであった。

鶴園（2014）は、西洋音楽と日本の関わりについて、その多様性と流れを把握する指標として以下の4つの段階を示している^{1）}。

1. 1850年代に始まる日本美術愛好の高まりが直接反映した、オペラやオペレッタのジャンルにおける日本趣味の流行。
2. 1889年のパリ万国博における東アジアの音楽の発見。その後日本美学に深く学んだ人々と新しい構造の音楽を発見した人々による音楽の変革。
3. 1900年代～1930年代にヨーロッパ、主にフランス楽壇に起こったジャポニスムの流行。
4. 第二次世界大戦後の音楽、演劇、舞踊等の分野における東西の密度の濃い交流と相互の影響関係の現れ。

なかでも、第三段階の1900年代から1930年代は、「美術のジャポニスムが終焉をみせていたにも拘わらず、日本の詩歌や日本的な情緒が

芸術家や芸術愛好家たちを捉えていたことは注目に値する」² ように、新しい素材を求めていた西洋の作曲家が、第二段階の潮流を経て数多くの作品を生み出した時期であった。特に、和歌や俳句は日本の伝統的な詩形であり、自然や日常生活の美を凝縮した表現が特徴である。このような短く簡潔な形式と豊かな情感表現は、西洋の文学における長大で形式的な詩とは異なり、新鮮で独特の魅力を放った。西洋の作曲家たちは、和歌や俳句が持つ言葉の選び方や象徴的な表現に感銘を受け、これらを自らの創作に取り入れるようになった。

ヨーロッパにおける和歌の移入は、19世紀前半から既に始まっており、1820年に初めて『万葉集』の一首が、オランダ語を経由してフランス語に翻訳され、1832年には『万葉集』30巻がシーボルトによってオランダに運ばれたことが明らかになっている³。

フランスでは、1871年にレオン・ド・ロニー(1837-1914)が『万葉集』や『百人一首』を中心とした和歌を初めてフランス語訳した『詩歌選集』を刊行した。その後、ジュディエット・ゴージェ(1845-1917)が『古今集』をフランス語訳した『蜻蛉集』を1885年に出版している。

一方、ドイツ・オーストリアでは、ルドルフ・ランゲ(1850-1933)が『古今集』第一巻を翻訳した『古今和歌集の古代日本の春の歌』(1884)に始まり、カール・フローレンツ(1865-1939)『東の国からの詩の挨拶』(1894)、パウル・エンダリンク(1880-1938)『日本の小説と詩』(1905)へと続いていく⁴。ランゲとフローレンツは、明治期にお雇い外国人教師として日本に招聘され、ドイツに帰国後は日本学者となった。彼らは日本滞在中から和歌や物語、風俗、精神文化

など様々な視点から日本文化を研究し西洋に紹介している。ランゲとフローレンツの和歌の翻訳は彼らの日本研究に基づくものであり、その後の翻訳詩集にも影響を及ぼしている。

フランスにおける俳句の紹介は、ヘンリー D. デイヴレー(1873-1944)によるアストン(1841-1911)『日本文学史』(1899)の仏訳本(1902)が最初であるとされている。その後、ポール＝ルイ・クーシュー(1879-1959)が本格的な俳句論である『日本の抒情的エビグラム』(1906)に続き、『アジアの詩人と賢人』(1916)を刊行した。この流れは、フランスの詩人たちによる「フランス・ハイカイ」へと導かれていく。

これらの日本詩歌の世界と西洋音楽が融合すると、どのような響きが生まれるのだろうか。また、ジャポニズムの流れを汲みつつ、一様ではない作品が生まれる背景には、どのような事情があったのだろうか。これらの問いに答えるべく、お話と音楽を通じてその魅力を感じていただく機会をつくりたいと考え、レクチャー・コンサート『音楽のジャポニズム—和歌と俳句の美の調べ—』を、ドイツ・オーストリアのジャポニズムについて研究する釘宮氏と共に企画した。プログラムは、以下の予定である。

1. ポーリーヌ・ヴィアルド〈日本女性〉(1892)
2. ウィルヘルム・キーンツル〈4つの日本の歌〉(1895)
3. ヨーゼフ・マルクス〈日本の雨の歌〉(1909)
4. エゴン・ヴェレス〈桜の花の歌〉(1912)
5. イーゴリ・ストラヴィンスキー〈3つの日本の抒情詩〉(1913)
6. モーリス・ドラージュ〈7つの俳諧〉(1923)
7. クロード・デルヴァンクール〈露の世〉(1924)

8. フェリックス・ワインガルトナー〈日本の細密画〉(1930)

9. アンリ・ジル＝マルシェックス〈7つの芸者の歌〉(1935)

大幸財団および科研費の助成により、無料(要申込み <https://x.gd/6zIVx>) の開催である。ぜひ多くの方にご来聴いただき、和歌と俳句の美の調べをお楽しみいただきたい。

¹ 鶴園紫磯子「音楽—近代音楽の誕生とジャポニスム—」『ジャポニスム入門』ジャポニスム学会編、思文閣出版、2014年、202-215頁。

² 同上、202頁。

³ 小倉久仁子「黎明期の万葉集翻訳」『万葉古代学研究年報』第15号、奈良県立万葉文館、2017年、5-12頁。

⁴ 釘宮貴子「カール・フローレンツの『東の国からの詩の挨拶 Dichtergrüsse aus dem Osten』(1894)とジャポニスムの歌曲」『徳島文理大学研究紀要』第107号、徳島文理大学、2024年、1-11頁。

「鈴木政吉プロジェクト」の今とこれから

七條めぐみ(愛知県立芸術大学)

愛知県立芸術大学「鈴木政吉プロジェクト」は、名古屋が生んだヴァイオリン王、鈴木政吉に関する資料調査のために2012年にスタートした研究プロジェクトである。当初は、戦前の『名古屋新聞』(『中日新聞』の母体の一つ。発行期間は1906/明治39年11月～1942/昭和17年8月)に掲載された鈴木政吉および鈴木ヴァイオリンに関する記事を集めることを目的とされていたが、実際に調べてみると和洋さまざまな演奏会や楽器の広告など、当時の名古屋の音楽生活をあらわす記事が多く見られることが分かった。そこで、音楽関連の記事を幅広く収集

し、記事一覧をデータベースとして公開することを見据え、まずは大正期『名古屋新聞』の記事の悉皆調査に着手した。研究プロジェクトでは井上さつき先生が代表を務め、筆者は学生メンバーの一人として記事の調査を行った。また、すでに明治期の名古屋に関する同様の調査・研究を行っていた小沢優子先生にも、オブザーバーとして加わっていただいた。プロジェクトでは2012年7月に日本音楽学会中部支部第105回定例研究会で発表し、研究上の意義と途中経過を報告した。翌年には愛知県立芸術大学芸術情報センター図書館のウェブサイトにて、「大正期『名古屋新聞』音楽記事索引・試行版」を公開し、作成した記事一覧を研究資料として活用できるようにした。現在は、大正5年までの音楽関連記事の全データと、大正15年までの演奏会記事索引を閲覧することができる(<https://www.aichi-fam-u.ac.jp/library/search/information/03.html>)。

以上のように、大正期『名古屋新聞』をあつかう「鈴木政吉プロジェクト」は、一定の区切りに達したと言える。本稿ではその後の動きについて報告したい。プロジェクトでは2012年8月に昭和期の調査にも着手し、『名古屋新聞』が『中日新聞』に統合される昭和17年8月までの記事集めを行った。ただし、昭和9年3月～11年、昭和14年～16年は未実施であり、昭和元年～5年は非常に抜けが多い状態であった。その後も欠落期間が埋められたり、再調査が行われたりすることはないまま、2014年度でプロジェクト自体が終了してしまった。その背景には、昭和期は大正期と比べて情報量が多く、短期間で調査を完了するのが困難であったことや、学生メンバーが代替わりをし、調査の引継

ぎがうまく行われなかったことが影響したと思われる。筆者自身も、2013 年秋からフランスに留学し、博士論文のための研究を前進させるのに必死で、プロジェクトのことは意識の隅に追いやられてしまった。

時は流れ 2022 年春、筆者が愛知県立芸術大学に奉職するようになり、研究室の整理をしていると、昭和期『名古屋新聞』の記事がどっさり残されていた。一体どうしたものかと、プロジェクトの過去のデータを探したが、どうも昭和期の記事が整理された形跡はない。その後、井上さつき先生、さらには学生メンバーだった卒業生に尋ねてみたところ、昭和期に関しては音楽関連記事を集める、すなわち調査の第一段階まで実施したものの、記事の一覧作成、分類、ファイリングといった第二段階には着手されていないことが分かった。その上、前述したように欠落期間も多いという、なんとも中途半端な状態である。幸い、戦前名古屋の音楽文化に関連する研究課題で助成金を頂くことができたため、「続・政吉プロジェクト」を発足させ、音楽学コースの在学生とともに調査済み記事の一覧を作成することにした。

2024 年 12 月時点で、調査済み記事の一覧作成はほとんど完了している。データ化にあたっては、記事をそのまま文字起こしするのではなく、掲載年月日、頁、記事見出し、分類（演奏、楽器、広告、ラジオ、その他）を記した一覧表を作成し、備考欄に開催概要、プログラム、楽器や広告の内容などを簡潔にまとめた。今後の目標は、(1) 欠落期間の調査を行い、昭和期の音楽関連記事一覧を大正期同様、図書館などの機関で公開すること、(2) 作成した一覧をもとに記事の分析を行い、戦前名古屋の音楽文化に

関する研究として発展させることの 2 点である。(1) については人海戦術的な労力を必要とするため、新たな予算獲得も視野に入れながら長期的な課題としたい。(2) については、筆者個人の研究課題と関連するだけでなく、記事整理にあたった学生メンバーも関心を抱いている部分である。昭和期では特に、レコード、ラジオ、映画といった新たなメディア・娯楽に関する記事が多く見られ、これらを通じて名古屋の人々がどのような音楽文化に接していたのかは、興味深いテーマだと言える。近い将来、音楽関連記事から見られる戦前名古屋の音楽生活として、みなさまに成果を発表できればと思う。

【事務局から】

■第 142 回定例研究会（予定）

日時：2025 年 3 月 9 日（日）13 時 30 分～

会場：愛知県立大学・愛知県立芸術大学サテライトキャンパス（愛知県産業労働センター ウィンクあいち 15 階）

開催方法：対面とオンラインのハイブリッド
（事前申込制）

内容：教育フォーラム

卒業論文・修士論文・修了論文合評会

司会：安原雅之（愛知県立芸術大学）

本年度、中部地方の大学・大学院に提出された論文から数編を紹介します（各論文の要旨を執筆者が発表します）。

発表者名、論文タイトル、申込方法などの最新情報は、中部支部ウェブサイトおよび、支部メーリングリストにてお知らせいたします。

■研究発表・原稿募集

中部支部では、定例研究会での研究発表や支部通信への投稿を随時受け付けております。研究報告、研究ノート、書籍・CD/DVD 紹介、または各種催し物の紹介・報告等でも構いません。発表・掲載時期、原稿の量などにつきましては、あらかじめ支部事務局にお問い合わせください。ただし発表時間、発行時期、原稿の分量等の都合によりご希望に添えない場合もありますので、ご了承ください。

事務局：明木茂夫（支部長）

〒466-8666

愛知県名古屋市昭和区八事本町101-2

中京大学文化科学研究所 気付

日本音楽学会中部支部事務局

T E L : 052-835-7194

F A X : 052-835-7192

電子メール：nogchubu@msj-chubu.org